



言葉の裏の意味を読み取る

言葉には、直接的な意味と、その裏にある意味があります。

例えば、煙草を吸う人が、ライターなどを持っておらず、ライターを借りるときに「火持ってる?」と聞くことがあると思いますが、この言葉をそのまま受け取ると「火なんて、熱くて持てるわけじゃないじゃないですか!」となってしまいます。他にも、筆記用具が自分の手元になくて、借りたいときに「書くもの持ってる?」と言うことがあります。これはこの言葉の裏には「書くものを持っていたら貸してくれませんか?」という意味があるのですが、この言葉をそのまま受け取って、「はい、持っていますよ。」とだけ答えることになると、「なんてこの人は心の冷めた人だ」となってしまいかもしれません。

さて、私が子どもの頃、今から約40年前は、学校はどんなことがあっても絶対に行かなければならない場所でしたから、学校でどんなに辛く苦しいことがあっても学校から逃げることはできませんでした。担任の先生から怒られて「家に帰れ!」とか「出ていけ!」と言われても、絶対に家に帰ることはできませんでした。この言葉の本当の意味は「家に帰りなさい」ということではありません。もし、その言葉通り家に帰ったら、先生はきっと「本当に家に帰るやつがいるか!」とさらに怒ったでしょう。また、家に帰ろうものなら、家で両親からその何倍も怒られていたでしょう。このどうしようもない立場、つまり学校の先生からは学校から出ていけと言われていたが、学校から出て行くわけにはいかないという、自分の身の置き場がない状況は、先生や親から叩かれたり大声で怒鳴られたりするより、かなりつらい状況でした。だからこそ、この言葉を言われたときは、よほどの悪いことをしたときであり、絶対に次からはやってはいけないと強く思ったものです。ですから、以前の学校ならば、この指導は有効なものであったと思います。

しかし、今の時代、この言葉を教師が言うと、どのようになるか…。この言葉をそのまま受け取って、本当に子どもは家に帰ります。「だって、先生がそう言ったから。」という理由です。「家に帰れ。」という言葉は、そのままでは不適切な指導です。しかし、言葉にはその裏の意味「学校にいる、教育を受けることができないほど、悪いことをしているということを心から反省しなさい」が含まれています。

保護者の方にとっても「先生が子どもに対して「家に帰れ」なんて、教育を受けさせる義務を保障しない、問題発言ではないか。」と言われる時代ではないでしょうか。

この言葉が教師として使えなくなってきた理由として、学校は必ずしも行く必要はないという考えがあるかもしれません。学校に無理をして行ったために、子どもが尊い生命を自ら落とすようなことがこれまでにあったため、以前は普通に行われてきた厳しい指導、子どもたちに精神的に負荷を与えるような指導が、行き過ぎた指導、不適切な指導、体罰というものになってきたように思います。

学校には行かなくてもよいということが成り立ってしまうと、社会人になっても「会社には行かなくてもよい」ということにつながりかねません。行きたくない理由と向き合う、我慢する、嫌なことを解決する力を身につける、学校のリズムに自分を合わせる…。命を懸けてまで学校に行く必要はないでしょうが、ある程度はこのような経験が必要のように思います。古い人間と言われそうですが…。

